

御衣並単衣御書

建治元年九月二八日 五四歳

おんころも ひとえぎぬ おわ
御衣の布、並びに御単衣給ひ候ひ了んぬ。

せんびやく
鮮白比丘尼と申せし人は、生まれさせ給ひて御衣をたてまつりたりけり。生長するほどに次第にこの衣大になりけり。後に尼とならせ給ひければ法衣となりけり。ついに法華經の座にして記^き削^{べつ}をさづかる。一切衆生喜見如来これなり。又法華經を説く人は、^{にゅう わ にんにく え}柔和忍辱衣と申して必ず衣あるべし。物たねと申すもの一なれども、^種うえぬれば多となり、竜は小水を多雨となし、人は小火を大火となす。衣かたびらは一なれども、法華經にまいらせさせ給ひぬれば、法華經の文字は六万九千三百八十四字、一字は一仏なり。此の仏は再^{さいしやうはいしゆ}生^{おんじゆ}敗^{いのち}種^{のん}を心符とし、^{のん}頭^ど本^と遠^と寿^とを其の寿とし、常住仏性を咽喉とし、一乘妙行を眼目とせる仏なり。「応化は真仏に非ず」と申して、三十二相八十種好の仏よりも、法華經の文字こそ真の仏にてはわたらせ給ひ候へ。仏の在世に仏を信ぜし人は仏にならざる人もあり。仏の滅後に法華經を信ずる人は「無一不成仏」とは如来の金言なり。この衣をつくりて、^裁か^帷た^子び^着ら^添をきそえて法華經をよみて候わば、日蓮は無戒の比丘なり、法華經は正直の金言なり、毒蛇の珠をはき、伊蘭の栴檀をいだすがごとし。恐々謹言。

九月廿八日

日蓮花押

御返事